

3 日本の思想

3.01 古代日本の思想と文化

日本の風土

・和辻哲郎：1889-1960 哲学者、評論家。兵庫県出身。東大教授。ニーチェ、キェルケゴールの研究から仏教美術、日本思想へと帰。風土を基盤とした文化的哲学を生んだ。著『人間の学としての倫理学』『風土』『古寺巡礼』など。

『() —人間学的考察—』

：風土とは、人々がその地方の気候や地形にもとづいた文化や生活様式を形成していきながら、自らの生き方を表現していく主体的な人間存在の表現である。

風土（自然環境と人間の相互関係の全体）の三類型

() 型風土 (東・南アジア)	湿潤, 自然の猛威と恵みから () 的・() 的 ※日本人：戦闘的恬淡・しめやかな激情
() 型風土 (アラビア・北アフリカ)	乾燥, 自然に () 的・() 的⇒人格神への服従
() 型風土 (ヨーロッパ)	湿潤と乾燥の総合, 自然の従順 ⇒ () 的自然, 従順な自然の支配⇒科学

⇒ 自然環境決定論的であり論証が不明確な部分が多い点, 日本文化を過大評価し天皇制と教育勅語の安易な擁護論となっている点で批判が多い

【和辻『風土』の記述】 和辻哲郎『風土——人間学的考察』（岩波書店, 1935 昭和 10）より

家族としての人の「間」は、牧場的、沙漠的、モンスーン的に明白に相違している。牧場的文化の始まりはギリシア人の海賊の冒険であった。その郷土の牧場を離れた冒険的な男たちが、多島海沿岸の諸地方を征服して原始的ポリスを建設し始めたとき、被征服地の女を取って妻とした。すなわち家族から脱出してきた男と、殺戮によって家族を破壊せられた女とが、ここに新しく家族を形成したのである。(略) だから、(略) 家の意義はポリスに対してはるかに軽くなっている。※傍点引用者

それに対して沙漠的な家族は、祖先以来の血統を背負った伝統的な存在として把握せられている。(略) しかし、沙漠的な存在の仕方は、この家族の優位をむしろ「部族」に譲った。遊牧生活の単位は部族であって家族ではない。部族の団結の厳しい制約の下においては、家族的な生活の共同はその意義を弱めてくる。

家族的な生活の共同に最も強く重心を置いたのは、モンスーン的な家族である。特にシナ及び日本における「家」である。(略)

「家」は家族の全体性を意味する。それは家長において代表せられるが、しかし家長をも家長たらしめる全体性であって、逆に家長の恣意により存在せしめられるのではない。特に「家」の本質的特徴をなすものは、この全体性が歴史的に把握せられているという点である。現在の家族はこの歴史的な「家」を担っているのであり、従って過去未来にわたる「家」の全体性に対し責任を負わねばならぬ。「家名」は家長をも犠牲にし得る。だから家に属する人は親子・夫婦であるのみならずさらに祖先に対する後裔であり後裔に対する祖先である。家族の全体性が個々の成員よりも先であることは、この「家」において最も明白に示されている。(略)

かくして我々は「家」としての存在の仕方が特に顕著に国民の特殊性を示すことを承認しなくてはならぬ。ところで日本の人間がその全体性を自覚する道も、実は家の全体性を通じてなされたのである。人間の全体性はまず神として把握せられた。しかしその神は歴史なる「家」の全体性としての「祖先神」にほかならなかった。それは古代における最も素朴な全体の把握であるが、しかし不思議にもその素朴な活力が国史の展開を通じて活(い)き続けているのである。明治維新は尊皇攘夷という形にあらわされた国民的自覚によって行われたが、この国民的自覚は日本を神国とする神話の精神の復興にもとづき、この復興は氏神の氏神たる伊勢神宮の崇拝に根ざしている。原始社会における宗教的な全体性把握が高度文化の時代になお社会変革の動力となりえたというような現象は、実際、世界に類がないのである。だから明治時代に他の国民との戦争において燃え上がった国民的自覚さえも、学者はそれ自身において理論づけようとはせず、依然として家のアナロジーによって説こうとしたのである。いわく、日本の国民は皇室を宗家とする一大家族である。国民の全体性は、同一祖先より出づるこの大きい家の全体性にほかならない。そこで国家は「家の家」となる。家のまわりの垣根は国境にまで拡大せられる。家の内部におけると同じく国家の内部においても距てなき結合が実現せられねばならぬ。家の立場において孝と呼ばれる徳は、家の家の立場において忠と呼ばれる。だから忠孝は本質において一致する。それはいずれも全体性によって個人を規定するところの徳である。

日本文化の特色

日本文化の（ ）性：「日本人ほど敏感に新しいものを取り入れる民族は他にないと共に、また日本人ほど忠実に古いものを保存する民族も他にはないであらう」（和辻哲郎「日本精神」1934）

「日本文化の（ ）性」：加藤周一 1955

罪の文化と（ ）の文化：ルース・ベネディクト『菊と刀——日本文化の型』1946

『（ ）社会の人間関係』：中根千枝 1967, 「ウチ」「ソト」を意識する日本の社会構造

『「（ ）」の構造』：土居健郎 1971

（ ）と（ ）：日本の伝統的生活の中には、ハレ着、ハレの日、ハレの門出、ハレの場など、特別な状態を表現する様式が発達している。

「晴」：あらたまった特別な状態、公的なあるいはめでたい状況

「褻」：日常的な普通の生活や状況

古代日本の宗教観

・（ ）神話：『古事記』『日本書紀』8世紀はじめに整理

⇒資料集 p.84

八百万（やおよろず）の神…畏怖・畏敬の対象…多神教

（ ）：自然の中に宿る霊への崇拝

（ ）：巫女（シャーマン）を中心とする呪術宗教

古代の神

自然神：イカズチ、ワタツミ、オロチなど 霊魂：「ち」「み」「たま」

人格神：天照大神（太陽神&皇祖神）、伊邪那岐、伊邪那美など

祟り神：病気、死、災害をもたらす超自然的な力 大物主神（奈良県大神（おおみわ）神社）

⇒ 祀りを要求して災いをもたらす、祀ることによって守護神ともなる性格を持つ

（ ）信仰：〈御霊〉は〈みたま〉で霊魂を畏敬した表現。個人や社会にたたり、災禍をもたらす死者の怨霊の働きを鎮め慰めることによって、その威力をかりて、たたり、災禍を避けようとしたのにはじまる。この信仰は、奈良時代の末から平安時代の初期にかけてひろまり、以後、さまざまな形をとりながら現代にいたるまで祖霊への信仰と並んで日本人の信仰体系の基本をなしてきた。

古代日本の倫理観

・（ ）中心の人間観

高天原（たかまがはら）：神々の世界

葦原中国（あしはらのなかつくに）：地上

（ ）・根の国：死者の住む暗く穢れた地下の国

⇒現世が最善の安楽な世界

・（ ）

自然のように清らかで、神に対する偽りが無い心、純粹、共同体に誠実な心

←→濁（きたな）き暗き心 = 私心

・（ ）：せいちよく）正しく真っ直ぐなこと。中世日本の徳目 ⇒ 誠

・（ ）：ツミケガレ）

神や共同体に対する道徳的罪悪、自然災害、不潔・不浄など区別は不明確

⇒ （ ）（ミソギ）、祓（ハラヒ）によって取り去ることができる

※（ ）（ハラヒ）の本来の意味は：罪や過ちに対する制裁として罪の代償を科すこと

古事記の神話——別冊国文学『日本神話必携』（學燈社）より

別天神五柱（ことあまつかみごはしら）

天地が始まったときに、高天原（たかまのほら）にまず天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）が、次に高御産巢日神（たかみむすひのかみ）、神産巢日神（かみむすひのかみ）の三神があらわれた。この三神は単独の神で姿を隠しておられた。国土はまだ未熟で、浮いている脂のようで、海月（くらげ）のようにただようている時に、葦の芽のように芽吹き立つものによってあらわれた神を、宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこぢのかみ）という。次に天之常立神（あめのとこたちのかみ）があらわれた。この二神も単独の神で姿を隠しておられた。以上の五神を別天神（ことあまつかみ）という。

神世七代（かみよななよ）

次に国之常立神（くにのとこたちのかみ）、豊雲野神（とよくもののかみ）、宇比地邇神（うひぢにのかみ）と妹（いも）須比智邇神（すひぢにのかみ）、角杵神（つのぐひのかみ）と妹、活杵神（いくぐひのかみ）、意富斗能地神（おほとのじのかみ）と妹、大斗乃弁神（おほとのべのかみ）、於母陀流神（おもだるのかみ）と妹、阿夜訶志古泥神（あやかしこねのかみ）、伊邪那岐神（いざなぎのかみ）と妹、伊邪那美神（いざなみのかみ）があらわれ、これらを合わせて神世七代という。

国生み

伊邪那岐（イザナギ）・伊邪那美（イザナミ）の二神は天神（あまつかみ）の「ただよう国を修理国成せよ」という命を受けて天浮橋（あめのうきはし）に立ち、矛で海水を掻き鳴らし、引きあげた茅よりしたたり落ちた潮が積もって淤能基呂島（オノゴロ）島となる。二神はオノゴロ島に柱を立て、これを廻って互いに左旋、右旋し愛の言葉をかけ合って夫婦となり、水蛭子（ヒルコ）と淡島を生む。

『古事記』からの引用

伊邪那岐

「汝（いまし）が身（み）はいかに成れる」

「あなたの体はどのようにできていますか」

伊邪那美

「わが身はなりなりて成り合はざる処一処あり」

「私の体には、成長して、成長していないところ（女陰のことを示す）が1ヶ所あります」

伊邪那岐

「わが身はなりなりて成り余れる処一処あり。故（かれ）このわが身の成り余れる処を以て、汝が身の成り合はざる処を刺し塞ぎて、国土（くに）を生み成さんと以為（おも）ふ。生むこといかん。」

「私の体には、成長して、成長し過ぎたところ（男根のことを示す）が1ヶ所あります。そこで、この私の成長し過ぎたところで、あなたの成長していないところを刺して塞いで、国土を生みたいと思います。生むのはどうですか。」

だが、ヒルコは葦船に入れて流し捨て、淡島も御子の中に入れなかった。この生み損じは女神が先に声をかけたためと判断したが、さらに天神の指示を仰ぎ、確認した後でやり直した結果、次々に、淡路島、伊予之二名島（いよのふたなのしま）（四国）、筑紫島（つくしのしま）（九州）、伊岐島、津島、佐渡島、大倭豊秋津島（おおやまとよあきつしま）（本州）を生む。これを大八洲国（おおやしまのくに）という。さらに後に、吉備児（きびのこ）島、小豆（あづき）島じま、大島、女（ひめ）島、知訶（ちかの）島、両児（ふたごの）島を生む。

神生みから三貴子誕生

イザナギ、イザナミの二神は次に神々を生む。それらは岩、土、砂、戸、家屋の住居関係の神、海、川、山、野、木、谷などの自然界の神、船、食物、火などの生活文化関係の神々である。しかし、母神は火神を生んだために女陰を焼かれて病臥し、へどから金山毘古神（かなやまびこのかみ）と金山毘売（かなやまびめのかみ）、糞からハニヤスヒコノ神、ハニヤスビメノ神、尿からミツハノメノ神、ワクムスヒノ神（この神の子・トヨウケビメノ神）が出現して、遂にこの世を退去した。イザナキノ神は泣き悲しみ、イザナミノ神を出雲国と伯伎国（ははきのくに）の境の比婆（ひばの）山に葬り、剣を抜いて火神の首を切り、この時多くの神々が出現した。

黄泉がえり

イザナキノ神は黄泉国（よみのくに）に赴き、妻の神に地上に戻るように説いた。イザナミノ神は、「私は黄泉国での食事を取ってしまって、この国を離れることは難しいけれど、この黄泉国の神と交渉してみよう。その間私を見てはいけない」と注意したが、イザナキノ神は待ちきれず、櫛の歯を折って火をつけ内部を見てしまった。イザナミノ神の頭、胸、腹、女陰、また左右の手足にもさまざまな雷（いかずち：蛇）がとぐろを巻き、体中にはうじ虫が集まって、ごろごろと音立てて這っていた。恐怖にかられて逃げるイザナキノ神にイザナミノ神は、恥辱を与えたと醜女（しこめ）たちに追わせる。イザナキノ神が投げる鬘（かづら）、櫛から次々に野葡萄、筍が生え、醜女がそれを食べている間に逃げる。次は八柱の雷神と軍勢が追い、イザナキノ神は剣先を敵に向け振りつつ逃げる。地上の世界との境で桃の実を三つ投げつけると敵はやっと帰って行った。

イザナキノ神は境に巨石を置き、イザナミノ神と向かい合って絶縁を言い渡し、イザナミノ神が「お前の国の人を一日に千人絞め殺そう」と宣言したのに対し、「それでは俺は一日に千五百の産屋（うぶや）を立てよう」と答えた。

黄泉国で穢れにあったイザナキノ神は、筑紫の日向の橘の小門（をど）の櫛原（あはきはら）で禊ぎをした。この時投げ捨てた杖、帯、囊、衣（きぬ）、褌（はかま）、冠、左右の手首の飾りから、様々の神が化成した。そして、禊ぎの中で、まず黄泉国の穢れによるマガツヒ二神が出現し、次にこのマガ（災厄）を改め直すナホビ二神とイツノメ（清浄な女神か）とがあらわれ、続いて三種（底、中、上）のワタツミノ神とツツノヲノ神が出現した。ワタツミ三神は阿曇連（あづみのむらじ）らが祖神として仕える神、ツツノヲ三神は住吉（すみのえ）にまつられる神である。

さて、イザナキノ神が左の目を洗ったときに出現した神は天照大御神（あまてらすおほみかみ）、右の目を洗った時に月読神（つくよみのかみ）、鼻を洗った時に建速須佐之男命（たけはやすきのおのみこと）が出現した。

天照大神

三貴子を得たイザナキノ神は喜び、天照大神には高天原、月読神には夜の国、須佐之男命には海原の支配を命じた。ところが、須佐之男命だけは仰せにしたがわず、青山を泣き枯らし河海を泣き乾かすほど泣きわめき、それで悪神たちの騒ぎがどっとあたりに満ち、すべての災いが起こった。命は、イザナキノ神の質問にも、私は亡き母のいる根の国に行きたい、と言うばかりなので、ついにイザナキノ神は須佐之男命を追放してしまう。このイザナキノ神は淡海の多賀に鎮座している。

そこで須佐之男命は、天照大神に事情を申して退散しようと高天原に昇った。だが、そのため山川は鳴り轟き、国土は揺れ動く始末。驚いた天照大神は、これは私の国を取りに来たのだと急いで男装した上で厳めしく武装し、弓を振り立て、固い地面に前向きに踏み込んで止まり、大地を沫雪（あわゆき）のように蹴散らして、荒々しい態度で待ち受ける。どうして昇ってきたのかという問いに須佐之男命は事情を話す、天照大神は、お前の心の清く誠実であることをどうして知ることができるのか、とまだ疑いを捨てない。そこで須佐之男命は、それでは「うけひ」をしてそれぞれ子を生まうと提案し、二神は天の安の川を挟んで「うけひ」をすることになった。

まず、天照大神は須佐之男命の剣を求めて、これを三つに折り天真名井（あめのまない）の水に浸して振り動かし、これを嚙みに噛んで、吹き出す霧の中に胸形君（むなかたのきみ）が祭る胸形三神（多紀理毘売命（タキリビメ）、市寸島比売命（イチキシマヒメ）多岐都比売命（タキツヒメ））が出現した。次に須佐之男命は天照大神の左右の髪、鬢、左右の手に巻いている玉飾りを求めて、天真名井の水に浸して振り動かし、これを嚙みに噛んで、吹き出す霧の中に、それぞれ、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命（マサカツアツカチハヤヒアメノオシホミミ）、天之菩卑能命（アメノホヒ）、天津日子根命（アマツヒコネ）、活津日子根命（イクツヒコネ）、熊野久須毘命（クマノクスビ）が出現した。この時、天照大神は後に出現した五柱の男神は、出現の基になったのが私の玉だから私の子、先の三柱の女神は出現の基になったのがお前の剣だから当然お前の子である、と判定された。

天岩戸

誓約によって身の潔白を証明したスサノオは、そのまま高天原に居座った。そして、田の畔を壊して溝を埋めたり、御殿に糞を撒き散らしたりの乱暴を働いた。他の神はアマテラスに苦情をいうが、アマテラスは、「考えがあつてのことなのだ」とスサノオをかばった。

しかし、アマテラスが機屋で神に奉げる衣を織っていたとき、スサノオは機屋の屋根に穴を開けて、そこから皮を剥いだ馬を落とし入れ、一人の天の服織女が驚いて梭（ひ）で陰部を刺して死んでしまった。ここにきて、アマテラスはスサノオの行動に怒り、天岩戸に引き籠ってしまった。高天原も葦原中国も闇となり、さまざまな禍（まが）が発生した。

そこで、八百万の神が天の安河の川原に集まり、どうすればいいか相談をした。オモイカネの案により、さまざまな儀式を行った。常世の長鳴鳥（鶏）を集めて鳴かせた。天の安河の川上にある堅い岩を取り、鉾山の鉄を採り、鍛冶師のアマツマラを探し、イシコリドメに命じて八咫鏡（やたのかがみ）を作らせた。タマノオヤに命じて、八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠（八尺瓊勾玉・やさかにのまがたま）を作らせた、アメノコヤネとフトダマを呼び、雄鹿の肩の骨を抜き取り、ははかの木を取って占（太占）をさせた。賢木（さかき）を根ごと掘り起こし、枝に八尺瓊勾玉と八咫鏡と布帛をかけ、フトダマが御幣として奉げ持った。アメノコヤネが祝詞（のりと）を唱え、アメノタヂカラオが岩戸の脇に隠れて立った。アメノウズメが岩戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神憑りをして、胸をさらけ出し、裳の紐を陰部までおし下げて踊った。すると、高天原が鳴り轟くように八百万の神が一斉に笑った。

岩戸神楽ノ起頭（三代豊国）この声を聴いたアマテラスは何事だろうと天岩戸の扉を少し開け、「自分が岩戸に籠って闇になっているというのに、なぜ、アメノウズメは楽しそうに舞い、八百万の神は笑っているのか」と問うた。アメノウズメが、「貴方様より貴い神が表れたので、それを喜んでいるのです」というと、アメノコヤネとフトダマがアマテラスの前に鏡を差し出した。鏡に写る自分の姿がその貴い神だと思ったアマテラスが、その姿をもっとよくみようと岩戸をさらに開けたとき、隠れていたアメノタヂカラオがその手を取って岩戸の外へ引きずり出した。すぐにフトダマが注連縄を岩戸の入口に張り、「もうこれより中に入らないで下さい」といった。こうしてアマテラスが岩戸の外に出てくると、高天原も葦原中国も明るくなった。

八百万の神は相談し、スサノオに罪を償うためのたくさんの品物を科し、髭と手足の爪を切って高天原から追放した。

出雲神話

スサノオは出雲の国に降り立った。そして、害獣であるヤマタノオロチ（八俣遠呂智）を切り殺し、国津神の娘と結婚する。スサノオの子孫である大国主はスサノオの娘と結婚し、スクナビコナと葦原中国の国づくりを始めた。

葦原中津国平定

アマテラスら高天原にいた神々（天津神）は、葦原中国を統治すべきなのは天津神、とりわけアマテラスの子孫だとした。そのため、何人かの神を出雲に使わした。大国主の子である事代主・タケミナカタが天津神に降ると、大国主も大国主のための宮殿建設と引き換えに、天津神に国を譲ることを約束する。この宮殿は後の出雲大社である。

アマテラスの孫であるニニギが葦原中国平定を受けて日向に降臨した。ニニギはコノハナノサクヤビメと結婚した。

山幸彦と海幸彦

ニニギの子である海幸彦・山幸彦は山幸彦が海幸彦の釣り針をなくしたことでけんかになった。山幸彦は海神の宮殿に赴き、釣り針を見つけ、釣り針を返した。山幸彦は海神の娘と結婚しウガヤフキアエズという子をなした。ウガヤフキアエズの子がカムヤマトイワレヒコ（またはカンヤマトイワレヒコ。後の神武天皇）である。

神武天皇

カムヤマトイワレヒコは兄たちと謀ってヤマトを支配しようともくろむ。ヤマトの先住者たちは果敢に抵抗し、カムヤマトイワレヒコも苦戦するが、結局、天孫のカムヤマトイワレヒコの敵ではなかった。カムヤマトイワレヒコは畝傍橿原宮の山麓で即位する。これが初代天皇である神武天皇である。

神武天皇の死後、神武天皇が日向にいたときの子であるタギシミミが反乱を起こす。カムヌナカワミミがそれを破り、皇位を継ぐ。

3.02 仏教伝来, 奈良・平安仏教

仏教の伝来

6世紀 百濟の聖明王が仏像と經典を欽明天皇に献上

：蘇我稻目（崇仏）、物部尾輿（もののべのおこし）（排仏）、天皇（中立）

仏＝蕃神（となりのくにのかみ）この神をおがめば国神の怒りを招く（『日本書紀』）

⇒推古朝の頃、飛鳥、斑鳩の地に仏教定着

・聖徳太子（推古朝の摂政）

十七条憲法

第2条「篤（あつ）く三宝を敬え、三宝とは（ ）なり」

第1条「和を以て貴しとなす」←（ ）からの引用

第12条「われ必ずしも聖にあらず、かれ必ずしも愚にあらず、ともに（ ）のみ」

著作『（ ）』：法華・勝鬘（しょうまん）・維摩（ゆいま）の三經の注釈書

「（ ） 唯仏是真」・・・仏教の人生観

奈良仏教

南都六宗（衆）

三論宗：竜樹の『中論』『十二門論』および提婆の『百論』の三論を主として研究・講義、禪觀の実践

成実（じょうじつ）宗：『成実論』を研究する学派、三論宗の寓宗

法相（ほっそう）宗：唯識の立場から法相（諸法つまり万象が有する本質の相状）を究明する。

俱舎（くしゃ）宗：世親の『阿毘達磨俱舎論』を研究する宗派。法相宗の寓宗

華嚴宗：宇宙全体を包括する毘盧遮那仏『華嚴經』をよりどころとする。「一即一切、一切即一」

律宗：『四分律』という戒律をよりどころにする。唐の僧（ ）が日本に伝える。唐招提寺

【特徴】

1. 国家仏教⇒（ ）国家：国・天皇の安泰や繁栄を祈願（＝玉体安穩）

政治的統一の手段としての仏教

ex. 藤原広嗣の乱など政局の動揺

→聖武天皇（三宝の奴）による741年（天平13）の国分寺造営の詔、743年の大仏造営発願の詔

国分寺で重視された經典

僧寺：『^{こんこうみょう}金光明最勝王經』読誦すると四天王がその国土を擁護すると説かれた護国の經典

尼寺：『法華經』国土の災害を除去し、女性成仏と庶民の滅罪のための經典

東大寺の毘盧遮那仏：『華嚴經』に基づく仏教の根元的な仏 ⇒大日經では大日如来と訳される

2. 学問仏教：經典研究 ⇒ 写經など經典重視

3. 都市仏教：僧侶が中央政界に進出 ex. 道鏡

（ ）688 - 769：中国、唐代の高僧、日本律宗の開祖。754年入朝後、東大寺に戒壇を建て、授戒伝律を行う。のちに唐招提寺を設けて戒律の教導に尽くす。

（ ）（遊行聖）688-749：諸国行脚の説法と道路の修理、堤防の築造、橋梁の架設、貯水池の設置など土木社会事業に努めるが、律令政府はこれを弾圧した。東大寺大仏造立の際には、勅命をうけて民衆の協力を求める。聖武天皇以下に菩薩戒を受け、大僧正、さらに大菩薩の号を与えられた。行基菩薩。

平安仏教前期

- 【特徴】 1.山岳仏教：平安遷都 ⇒政治に結びついた南都仏教界の肅正刷新をねらう
2.密教化：密教の呪術的性格が貴族のニーズに合致

・ () (伝教大師) 767-822

：日本天台宗の開祖。近江（滋賀県）の人。還学生(げんがくしょう＝短期留学生)として空海とともに804年入唐し、天台宗の奥旨と禅と密教を学んだ。8か月後に帰国、一宗の独立を許されたが、戒壇の独立の勅許がおりたのは没後である。

日本天台宗（天台法華宗）、比叡山（ ）寺：天台法華宗のみならず、達磨系の禅、円頓戒、密教という、同時代の中国仏教をあわせて、奈良仏教に対抗する新仏教運動の根拠とした
→後に弟子の円仁、円珍らによって本格的に密教化（ ）

大乘菩薩戒：鑑真が伝え、南都仏教で与えられていた具足戒を小乗戒であるとし、天台独自の大乘戒のみによる授戒制度を整えることによって、南都仏教からの独立を目指した。

法華（ ）思想：法相宗の徳一（とくいち）は修行者の能力に応じて声聞（しょうもん）乗、縁覚乗、菩薩乗の三種類の教えがあると主張し、最澄は、法華経にもとづいて、三乗は人びとを導くための方便にすぎず、実は唯一つの真実の教えがあるのみで、それによっていかなる人間もすべて平等に仏に成ることができる（ ）と説く。この論争を三一権実（さんいちごんじつ）論争あるいは三乗一乗論争という。

著作 『（ ）』：天台宗の学生のための教育方針と規則

「国宝とはなんぞ。宝とは道心なり…」：大乘菩薩行に励む僧こそ国の宝

『（ ）』：小乗具足戒（二百五十戒）から大乘菩薩戒（十重四十八軽（きょう）戒）へ

・ () (弘法大師) 774-835

：真言宗の開祖。讃岐の人。入唐して長安青竜寺の恵果に真言密教を学ぶ。帰国後、（ ）山に金剛峯寺を建立。弘仁14年には東寺を与えられ、これを国家鎮護の祈祷道場とした。綜芸種智院を設立して子弟を教育。書にすぐれ、三筆の一人といわれる。→（ ）東寺の密教

真言宗（真言陀羅尼宗）：万有一切は地・水・火・風・空・識の六つの要素（六大）からなり、（ ）と本質的に同一。その様相は、大日如来を中心とし、その顕現としての仏菩薩などの集合した宇宙的統合体の曼荼羅（マンダラ）として表現される。大日如来の身体（行為）・言葉・意（こころ）の秘密のはたらき（三密）は、すべての生けるものが本来具有する。これを開発するためには、悟りを求める心をおこし、日常の生活倫理の実践を前提とし、手に印契（いんげい）を結び、口に真言（マントラ）を唱え、心を仏の悟りの境地に置けば、大日如来と自己の三密は合一する＝（ ）

著作『（ ）』 仏教が儒教、道教よりもすぐれた教えであると主張

『十住心論（じゅうじゅうしんろん）』 空海の真言密教の教理を集大成

平安仏教後期

飢饉・疫病・地震・洪水 ⇒（ ）思想：釈迦の入滅後、正法・像法に次ぐ時期で仏法が衰え社会に混乱が起これと考えられた（日本では1052年末法説）

阿弥陀浄土信仰：念仏によって極楽往生を願う信仰

- ・（ ）（市聖いちのひじり）：諸国遊行、念仏の功德を庶民に布教。浄土宗の先駆
- ・（ ）＝恵心僧都：天台宗の学僧：『往生要集』：「厭離穢土、欣求浄土（おんりえど、ごんぐじょうど）」この世を厭い浄土への往生を求める⇒後の浄土信仰に影響

浄土三部経：無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経

3.03 鎌倉仏教 法然 親鸞 一遍

法然（源空） 1133 - 1212

：浄土宗の開祖。美作(みまさか)国(現岡山県)の豪族の子として生まれ、父の遺言により出家したといわれる。()山で修行、()と唐の()の『観無量寿経疏』の影響で浄土門へ。南都北嶺の旧仏教からの弾圧を受けるが、貴族の一部から在家民衆のあいだに広がる。

【主著】

『()』: 阿弥陀(無量寿) 仏が諸行のなかから選択して本願の行とした念仏に関する書

『一枚起請文』: 念仏の要義を1枚の紙に平易な文章で書き、釈尊・阿弥陀に偽りのないことを誓った文。つねに法然のもとで仕えてきた源智が、師の命終が近いことを知り、没後に門人たちの間で異義の生じることを恐れ、浄土宗の肝要を懇望したので、法然がこれに応じてみずからしたため源智に授与した。浄土宗では法然の遺訓として最も尊重する。京都の金戒光明寺に真筆と伝えるものを襲蔵する

【思想と信仰】

- ・浄土宗：弥陀の本願を信じ、念仏を唱えることによるのみ、一切衆生は極楽浄土に往生できる
- ・弥陀の本願：阿弥陀仏が()菩薩としての修行の際にたてた誓願。48の本願の内の第18番目が念仏往生の願。「一切の生あるものが、至心に信楽(しんぎょう)して私(弥陀のこと)の浄土に生まれようと欲し、わずか十声の念仏でも唱えた人を救済できないならば、仏とはならない」
- ・()：往生を願うなら聖道門を捨て(=念仏以外の行をせず)、ただひたすらに念仏を唱えること
cf. 称名念仏(しょうみょうねんぶつ)：「南無阿弥陀仏」の6文字の名号を口に唱えること。≠観想念仏
- ・他力浄土門(他力易行門)：阿弥陀仏の本願にすがって極楽浄土に生まれ、悟りを得ようとする教門
←→自力聖道(しょうどう)門：自力で悟りを得ようとする教門=末法の時代には困難
- ・弾圧の理由：専修念仏以外の宗教を否定し悪行を容認する危険思想を持つ

一枚起請文(全文)

唐土(もろこし)我朝(わがちょう)にもろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず。又学問をして念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細(しさい)候(そうら)わず。ただし三心[1](さんじん)四修[2](ししゅ)と申すことの候(そうろ)うは、皆決定(けつじょう)して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候うなり。この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候(そうろ)うべし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学(がく)すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道(あまにゅうどう)の無智のともがらに同じうして、智者(ちしゃ)のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。証の為に両手印をもってす。浄土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存、この外に全く別義(べつぎ)を存ぜず、滅後(めつご)の邪義(じゃぎ)をふせがながために所存をしるし畢(おわ)んぬ。
建暦二年正月二十三日 大師在御判(原文には「源空(花押)」とある)

[1]三心：「至誠心(誠実な心)・「深心(深く信ずる心)・「廻向發願心(願往生心)」

[2]四修：浄土教において行を修める四つのしかた。恭敬修(くぎょうしゅ)。阿弥陀仏とその聖衆(しょうじゅ)を恭敬礼拝すること。無余修(むよしゅ)。専ら仏の名を称(とな)え他の行いを雑えないこと。無間修(むけんしゅ)。行を間断させず、また煩惱(ぼんのう)をまじえないこと。長時修(じょうじしゅ)。恭敬修・無余修・無間修を命終るまで修めつづけること

親鸞 1173 - 1262

：() 宗の開祖。比叡山で修行の後、法然の弟子となる。浄土門への弾圧の際、越後国（新潟県）に流され、恵信尼と結婚。妻帯と非僧非俗を宣言して愚禿（ぐとく）親鸞と称する。戒律を守れぬ肉食妻帯の愚か者こそが阿弥陀仏の救いの対象であることを示した。

【主著】 『()』：仏の真の教えが大無量寿経であることを示す浄土真宗の根本教典
『()』：著者は弟子の唯円。他力本願の真意を伝える親鸞のこぼしを掲げる。

【思想と信仰】

- ・信心為本：「涅槃の真因は唯信心を以てす（浄土往生の真の因は、ただ信心一つである）」（『教行信証』）
- ・() 説：悪人こそが弥陀に救われ、往生するのにふさわしい
善人：自力作善の人…自力で功德を積んで救われようとする人
悪人：煩惱具足のわれら…自分の罪業の深さの自覚があり弥陀の本願にすがろうとする人
⇒「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」（『歎異抄』）
- ・() 他力：念仏を唱えることさえ自力ではなく、すべてが弥陀のはからい（回向）による
- ・()：自力のはからいを一切捨て、阿弥陀如来の絶対他力につつまれてまかせきった境地
- ・報恩()の念仏：阿弥陀仏の本願を信じるとき、浄土往生がきまる。つねによく念仏をと
なえ、救ってくれる仏の恩を感謝すべき。（『教行信証』）
※念仏を唱えて（自力）往生するのではなく、往生させてくれることへの感謝の念仏

一遍 1239 - 89

：() 宗の開祖。伊予（愛媛県）の豪族出身（全国を遊行…遊行上人、()）

- ・日常を臨命終「時」（臨終）と心得て、常に念仏を唱える。故に「時」宗といわれる。
「念仏の行者は知恵をも愚痴をも捨、善悪の境界をもすて、貴賤高下の道理もすて、地獄をおそるゝ心をもすて、極樂を願う心をもすて、又諸宗の悟をもすて、一切の事をすて、申念仏こそ、弥陀超世の本願に尤かなひ候へ」
- ・「() 念仏」で時宗を広める。南無阿弥陀仏の六字名号に節をつけて詠唱し、その節拍子にあわせて踊る宗教舞踊
- ・名号即往生：「念々の称名は念仏が念仏を申すなり」「よろず生きとし生けるもの、山河草木ふく風たつ波の音までも念仏ならずといふことなし」
- ・賦算：「南無阿弥陀仏 決定往生 六十万人」と書かれた念仏札を配ること。「信不信をえらばず、浄不浄をきらわず」札を配った。
- ・神祇崇拜の肯定。⇒法然、親鸞は神祇に対して不拝を説く

3.04 鎌倉仏教 栄西・道元と日蓮

禅：ディヤーナ（サンスクリット語）の音写。静かに考えること。古代インドで、ヨーガとよばれた瞑想法のうち、精神統一の部分が仏教に取り入れられ、とくに中国と日本で極度に洗練され、独自の思想として発展した。

禅宗：（ ）：ボーディダルマ）がインドから中国に伝える。日本では、鎌倉時代より江戸時代の初期、中国より伝えられた 24 流 48 伝。今では臨済、曹洞、黄檗の 3 派に大別。

達磨四聖句

不立文字（ふりゆうもんじ）：悟りの境地は文字で伝えることはできない

教外別伝（きょうげべつでん）：禅の神髄は経典をこえたところにある

直指人心（じきしにんしん）：自分の心を見つめ、

（ ）（けんしょうじょうぶつ）：仏性に目覚めれば仏となる

ねんげみしょう

拈華微笑：仏陀が耆闍山（りょうじゅせん）で説法していると、梵天（ぼんてん）が金婆羅華（こんばらげ）の花を献じ、仏陀は黙って花を大衆に示すと、摩訶迦葉（まかかしよう）が 1 人破顔微笑（みしょう）したので、仏陀は迦葉に正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）を伝えた、という説があり、それが立宗の基となっている。宋代以降の禅宗で盛んに用いて、「以心伝心不立文字」の主張を根拠づける話とした。釈尊の教えが、知識分別では把握できないものであることを説いたものである。

栄西（えいさい・ようさい）1141-1215

：日本（ ）宗の開祖。比叡山修行後、南宋から臨済禅と喫茶を伝える。天台の復興をめざし（禅密兼修）、戒律と禅によって墮落した仏教界を刷新しようとした。⇒五山文学、茶道など禅文化

【主著】『（ ）』：禅宗への非難に対して禅宗の使命を述べる。禅の修行が鎮護国家に役立つという主張。天台宗の攻撃に備えるため、栄西の禅が最澄所伝の禅の伝統を今日に生かすものであることを述べている。

『（ ）』：喫茶と喫桑の薬効を説き勧めた書。

・（ ）：悟りを得させるための問答。

ぎゅうかそうらい

牛過窓櫺：五祖、法演が質問を出した「牛が格子窓を通り過ぎていく。頭も角も四つ足も全て通り過ぎていったのに、何故か尻尾だけが通り過ぎていかない。これはどうしてなのか」（『無門関』第三十八則）

道元 1200-53

：日本（ ）宗の開祖。比叡山に学び天台本覚思想に疑問を持つ。一切衆生はもともと仏であると天台宗では教えるのに、すでに仏である人がなぜ修行しなければならないか、という疑問が解けず、栄西門下の明全に師事した後、入宋。天童山の如浄に参じて大悟する。

⇒「人々皆（ ）なり、かならず非器なりと思うことなかれ」（随聞記）

【主著】『普勸坐禅儀』道元が宋から帰国した年に著した開教伝道の宣言書

『（ ）』：仏法の真理、修行のあり方、宗門の規則などを和文で叙述。

懐奘（えいしょう）著：『正法眼蔵随聞記』道元の語った修行の心がまえの記録

末法思想と念仏の批判⇒自力による修行の重視：自力作善

・（ ）：坐禅にひたすら打ち込むこと

・（ ）（一如）：修（修行＝坐禅）と証（悟り）は一体であるということ

・（ ）（しんじんとつらく・しんしんだつらく）：心も身体も執着を離れて悟りの境地に入る

「仏道を習うというは、自己を習うなり。自己を習うというは、自己を忘るるなり。自己を忘るるというは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるというは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。悟迹（ごせき）の休歇（きゅうかつ）なるあり、休歇なる悟迹を長長出ならしむ。」（正法眼蔵）

日蓮 1222-82

：日蓮宗（法華宗）の開祖。安房国長狭郡東条郷片海（千葉県安房郡天津小湊町小湊）で生まれた。清澄山（きよすみやま）の清澄寺（せいちょうじ）に入り、住僧の道善房を師として修学に励む。比叡山遊学の旅に上り、比叡山を拠点としながら、京都・奈良の諸大寺を訪れ、高野山、四天王寺に足を伸ばして修学したが、その目に映ったのは浄土教の隆盛である。これを天台宗の正統である法華経信仰の衰退ととらえ、これを復興することによって現世の平安を獲得することを誓う。

・主著『（ ）』：法然説く浄土教を禁圧して『法華経』に帰依しないならば、国内に内乱が起こり、他国から侵略を被るであろうと、為政者の宗教責任を問う著作。前執権、北条時頼に上呈。

『（ ）』：佐渡流罪中、法華経行者としての日蓮の自覚と責任を説く。受難こそ末法の世における（ ）の証であると主張し、「上行菩薩の応現日蓮」の自覚をうたい上げている。とくに「我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ」の語は、日蓮の三大誓願といわれる。

・法華経：妙法蓮華経（法華経）こそが真の教え。末法の世では「南無妙法蓮華経」の唱題のみが救いに至る道とする。釈迦仏はこの世の霊鷲山（りょうじゅせん）上において法華経を説いたとされているので、娑婆世界は釈迦仏の仏国土（霊山浄土りょうぜんじょうど）であると解釈された。

本地：（ ）の本仏 → 垂迹：釈尊

⇒浄土門批判

現世を厭離して来世の極楽往生を欣（ねが）う浄土門の蔓延が災厄を招いている。法華経にもとづいて、この穢土を仏国土化すべきである。

- ・（ ）：日蓮の行った教化法。破折調伏の意、相手の立場や考えを容認せず、その誤りを徹底的に破折して正法に導く厳しい方法
- ・（ ）：「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊」（天台除く）他宗の攻撃

神仏習合

：神道信仰と仏教信仰との融合調和

（ ）：6世紀ころから、神社に所属してその境域の内外に建てられた寺。宮寺、別当寺、神供寺、神護寺、神願寺ともいう。奈良時代に神仏習合の考えがおこり、神は仏法を喜ぶとされることから神前読経などの仏事の必要が意識され、建立されるようになった。神社に祀られている神を擁護する守護神的役割。

・（ ）説：仏（本地）が世の人を救うために姿を変えてこの世に現れたのが神（垂迹）とする説。平安初期から。

真言宗：（ ）神道：伊勢内宮の祭神、天照大神は胎藏界の大日如来。伊勢外宮の豊受大神（とようけのおおみかみ）は、金剛界の大日如来。伊勢神宮の内宮と外宮は胎藏界と金剛界の両部で、この両部が一体となって大日如来の顕現たる伊勢神宮を形成。

天台宗：（ ）神道：比叡山のふもと滋賀県大津市の日吉大社は山王権現とも称され、山王権現（日吉大宮権現）は釈迦の垂迹であるとされた。

⇒（ ）思想：神は仏・菩薩が権（かり）に現れたもの（1868年神仏分離、権現号の使用禁止）例）日吉神社⇒山王権現、熊野三山⇒熊野三所権現、箱根神社⇒箱根権現、徳川家康⇒東照権現

・（ ）説：神が本地で仏・菩薩が仮に姿を現したものとする説。鎌倉末期以降、伊勢神道、吉田神道など。

⇒明治初年の神仏分離までつづく

3.05 日本儒学 朱子学派 林羅山など

朱子学派：鎌倉時代に（ ）宗の禅僧に学ばれる。藤原惺窩とその門人林羅山らによって江戸幕府の体制教学となった。

藤原惺窩 1561 - 1619

：歌学の名門冷泉家に生まれる。京都五山の一つ相国寺（しょうこくじ）に学ぶが仏教を捨て儒学者となる。文禄・慶長の役の捕虜、朝鮮儒者姜沆（きやうこう）の協力を得て、日本初の朱子学注釈書『四書五経倭訓』を完成させる。近世儒学の開祖、（ ）派の祖とされる。
徳川家康に儒教講義 ⇒ 弟子の（ ）を家康に推挙
朱子学・陽明学の弁別にこだわらなかった
「天人一の如きものなり」

（ ） 1583 - 1657

- ・主著 『（ ）』：五常について説明した朱子学の入門書。
『三徳抄』：「智の人は惑わず、仁の人は憂えず、勇の人は恐れぬ」（論語）
神儒合一：儒学と神道の同根論（三種の神器は三徳の象徴）
『本朝通鑑（ほんちょうつがん）』：神代から1611年に至る間の漢文による編年体の史書。
- ・幕藩体制の思想的基礎 湯島聖堂学問所 ⇒ 昌平坂学問所
- ・（ ）の理：士農工商身分秩序の正統化
「天は尊く地は卑し。天は高く地は低し、上下差別あるごとく、人にもまた君は尊く、臣は卑しきぞ…その差別なくば国は治むるまい」『春鑑抄』
- ・（ ）：常に心に敬をいだし、上下定分の理をわきまえる。
- ・（ ）：つつしむ：私利私欲ではなく、つねに理（公の秩序）と一つであることを求める。

（ ） 1618 - 82

- ・南村梅軒に始まる海南学派、谷時中の弟子。崎門（きもん）学派を形成
- ・（ ）：敬をもって心を修養し、義をもって対人関係を正す。敬義を道徳の中心にすえる。
- ・（ ）神道：儒学と神道を合一した儒家神道。天皇崇拜に基づく大義名分、封建道徳。中国の儒教と日本の神道との根本における冥合一致を確信
⇒ 尊王運動（水戸学）に影響を与える。弟子の佐藤直方と浅見綱斎（けいさい）は反対して破門

（ ） 1668-1755

弟子：新井白石（徳川家宣、家継に仕え、幕政を補佐。武家諸法度の改正、貨幣改鑄など）
：雨森芳州（あめのもりほうしゅう）（朝鮮語、中国語に通じ、対馬藩の文教と対朝鮮外交担当）
：室鳩巢（むろきゅうそう）（徳川吉宗の侍講、赤穂浪士事件を土道宣揚の鑑として称揚）

（ ） 1630-1714

- ・ 実証的な（ ）学（中国伝来の薬物学、動植物、鉱物の効用の研究）
- ・（ ）を重視する合理的批判的精神
- ・ 主著『（ ）』『大和本草』
「信ずべきを信じ、疑うべきを疑う」
「民生日用」の学としての儒学

3.06 日本儒学 陽明学 中江藤樹 熊沢蕃山

陽明学

c f. 王陽明 (明代 15, 6 世紀の儒学者・政治家) : 朱子学批判, 心即理, 知行合一, 致良知

() 1608-48 (日本陽明学の祖) 農民⇒武士

滋賀に私塾「藤樹書院」を開く ⇒ 近江聖人と呼ばれる

主著『()』: 問答形式で『孝経』の「孝」を中心とする道德哲学を啓蒙的に説いた

・「()」: 人倫・宇宙の根本原理

= () () (懇ろに親しみ, 敬い侮らない)

cf. 人倫: 君臣・父子・兄弟・夫婦など上下尊卑の人間関係や秩序。また, そのような人間関係を保持する道德・倫理。転じて, 人としての道や倫理。

「てんにありてはてんのみちとなり, 地にありては地のみちとなり, 人にありては人のみちとなるもの也。元来名はなけれども, 衆生にをしへしめさんために, むかしの聖人, その光景をかたどりて孝となづけ給ふ」(『翁問答』)

・() : 時と場所と身分に応じて適切な判断を行う

行為の形式ではなく心の働き重視 ⇒ 王陽明の致「良知」(善悪を判断する能力)

熊沢蕃山 1619-91 (中江藤樹に学んだ陽明学者, 岡山藩で藩政改革, 治山治水事業を行う)

・主著『集義和書』『大学或問』

・〈 〉 論を日本の国情に即して論じた

→ 治水治山: 無計画な山林伐採をやめ, 植林を行うことで, 洪水や干ばつを防いだ

大塩平八郎 1793-1837 (江戸後期の陽明学者, 大坂町奉行元与力)

・天保の飢饉のさなか, 町奉行らの施策に抗議して事件を起こし, 〈知行合一〉をみずから実践して命を絶った

3.07 日本儒学 古学派 山鹿素行 伊藤仁斎 荻生徂徠

古学派

：江戸時代に起こった儒学の一派。朱子学、陽明学などに対して、注釈によらず、経書の直接研究により孔孟の真意を探究しようとするもの。山鹿素行、伊藤仁斎、荻生徂徠ら。

山鹿素行 1622-85 (儒者、兵学者、古学の祖)

- ・ 古学を提唱。山鹿流軍学の始祖。
- ・ 主著『()』：士道の確立を説く。朱子学を批判したため赤穂に配流
朱子学=君臣、父子などの人倫を軽視し、自己の内側に最高善を求める内観的な思想として批判
- ・ ()：士の職分は農工商三民を率いて道を実現すること。
武士道「弓矢をとる身のならい」⇒士道
日本が聖人の道の行われた最もすぐれた国

←→ ※山本常朝の聞き書き『()』「武士道とは死ぬことと見つけたり」

伊藤仁斎 1627-1705 (古義学派の祖、京都堀川に古義堂を開塾⇒堀川学派)

- ・ () 学：朱子学、陽明学を媒介とせず、直接『論語』『孟子』の熟読から道義を究める
古義学は道德の基準を人情におくなど元禄期町人文化を代表する側面
⇒朱子学批判「専ら()に依って断決すれば、則ち残忍刻薄の心勝ちて寛裕仁厚の心すくなし」
「聖人は天地を以て()となす」←→死物
- ・ 主著『()』：童子に説き聞かせるという形式をとり仁斎学を整然と体系的に示す
『論語古義』(論語は最上至極宇宙第一の書)『孟子古義』『語孟字義』
⇒朱子の注釈を排除して、直接『論語』『孟子』の本文を読解し聖人の原義を求めよ
- ・ ()：自他に偽りのない心。「聖人の道は()のみ」
具体的には()の実践 ⇒ 清明心につながる
- ・ 仁・愛：根底には()「誠ならざれば仁、仁にあらず」

荻生徂徠 1666-1728… () 学派の祖

主著『()』、『弁名』

：先王(聖人)の道=天下を安んずる営み、先王(古代中国の理想的君主)の制定した政治制度
『論語』『孟子』中心主義批判：「論・孟」より古い『六経(りっけい：詩・書・易・春秋・礼・楽)』の
重視による古道復元 ⇒ 古文辞自体の客観的研究必要

道 = ×道德 = 礼楽刑政=先王の形成した政治制度

()の道/聖人の道 = 安天下の道 ⇒ ()：世を治め民を救うこと=政治
※荻生徂徠の思想の特徴：強い政治志向性と、道德を論じないところからくる人間性への寛容

3.08 国学 本居宣長

国学

：江戸時代に起こった学問の一つ。記・紀・万葉など、日本の古典を文献学的に研究し、日本固有の文化を究明しようとしたもの。国学の四大人（しうし）、契沖（または荷田春満）・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤などを中心として展開した。江戸時代には、漢学に対抗して古学・和学・皇朝学・本教学などと呼ばれた

【国学の展開】

文献学的方法、古代社会の理想化を特色とする学問潮流

⇒古代に民族精神の源泉を求める思想体系

⇒幕末期、日本の歴史的個性性を尊王論と結びつけることでいちじるしいイデオロギー化

cf.水戸学：尊皇攘夷思想 明治初年の神道国教化政策：神仏分離、廃仏毀釈

（ ）（**国学の先駆者**）1640-1701 摂津（兵庫）尼崎 真言宗の僧⇒隠棲し研究に従事

主著『（ ）代匠記』：万葉集の注釈書

「此の集を見るは、古の人の心に成りて、今の心を忘れて見るべし」

漢籍、仏典、悉曇（しったん：梵字サンスクリット語）に精通し、独創的な古典の注釈研究

古代の歴史仮名遣いを明らかにするなど、文献学的方法を確立

（ ）（かだのあずままる）1669-1736 京都伏見の神官、契沖の万葉学と伊藤仁斎の古義学に影響を受ける

主著『創学校啓』：京都東山の地に国学校を創建すべく幕府に上請したが実現せず

「日本書紀」「万葉集」の研究：「神皇の教」の衰微を嘆き古道の復興を主張

賀茂真淵（かものまぶち）1697-1796 遠江国浜松に生まれ、荷田春満に学ぶ

主著『万葉考』『歌意考』：万葉集をよく読み、手本として歌をつくり、古代精神への復帰主張。

『国意考』：儒教の非を論じ日本古来の歌道の経世上の価値を説く

万葉集を主とする古典の文献学的研究⇒「高き直（なお）き心」（おおらかで素直な心）を理想

「（ ）（益荒男振）」：万葉集に見られるような五・七調の男性的なおおらかな風儀。

⇒万葉主義：「大和国は丈夫国にして古へは女もますらをにならへり、故（かれ）万葉集の歌はますらをの手ぶり也」

「（ ）（手弱女振）」：優艶で温雅な、技巧的で婉曲な女性的風儀。賀茂真淵はこの古今和歌集の歌風を批判したが、本居宣長はこれを重視した

（ ）：中国風の思惟と文化により古代の日本のよさが失われた＝「人の心」による作為

⇒ 文字もなき**天地自然**の質朴な古代日本が称揚される……老荘的自然観の影響ともいわれる

本居宣長 (もとおりのりなが) 1730-1801 伊勢国 (三重県) 出身

京都遊学中に荻生徂徠の古文辞学と契沖の書に啓発されて「源氏物語」などを研究。賀茂真淵の手引きを受け、「古事記」の研究に着手。

主著『源氏物語玉の小櫛(たまのおぐし)』: 源氏物語の注釈「もののあわれ」

『玉勝間 (たまがつま)』: 随想集,

『()』: 古事記の注釈書, 『初山踏』『直毘霊』

() の道…日本の古道: 神代の昔から伝わり, 神の意のまま, まったく人為を加えない道。神代から伝えられた, 日本固有の物の見方や考え方。

「()」…文芸の本質: 平安時代の文芸の美的理念。外界である「もの」と, 感情を形成する「あはれ」との一致する所に生ずる調和した情趣の世界の理念化。自然・人生の諸相にふれてひき出される優美・繊細・哀愁の理念。その最高の達成が「源氏物語」。

「あはれ」: 「見る物聞く事なすわざにふれて情(こころ)の深く感ずる事」『石上私淑言(いそのかみのささめごと)』

() : 偽りのない真実の心, 素直でおおらかな心「よくもあしくも生まれたるままの心」

↔ さかしら心: 利口ぶった心

大和心 (大和魂): 日本民族固有の精神, 人間の自然の心情のままにすなおでやさしく, めめしくもある心映え

↔ () ところ: 漢籍, 儒教や仏教などを学んで, その説に感化され, 中国の国風や文化に心酔するところ。宣長はこれを排斥すべきだと考える。

⇒『古事記伝』によって, 高天原・葦原中国・黄泉国の三層世界観, 天地万物を生み出す創造神としての産霊(むすびの)神観, 日の神・皇祖神としての天照大神の本国=皇国の優越性が主張された。

平田篤胤 (ひらたあつたね) 1776-1843 秋田藩出身

: 本居宣長の著書に感激し, 夢の中で宣長から死後の門弟たる認可を得たと称して, 本居春庭(はるにわ)に入門
主著『霊能真柱(たまのみはしら)』『古史徴』『古史伝』『仙境異聞』

() 神道の完成: 日本の古典の解釈に基づき, 儒教・仏教の影響を排して, 純粹に日本古代の神道に復することを主唱した神道説。宇宙開闢論, 幽冥信仰, 因果応報思想などを取り入れて, 平田神道ともいわれる神秘的な神学体系を作り上げた。

⇒ 学問的研究から宗教的信仰へ: 儒教・道教・洋学を折衷して皇国の優越性を独善的に主張。

⇒ 尊皇攘夷運動, 維新後の神仏分離, 神祇官行政, 国家神道へ大きな影響 fanatic

神道

古代	古神道	日本古来の民族宗教
平安	両部(りょうぶ)神道	真言宗による本地垂迹説
	山王(さんのう)神道	天台の教義による神道説
鎌倉	() 神道 (度会(わたらい)神道)	伊勢神宮の神官, 度会行忠による反本地垂迹説。密教の胎藏・金剛両曼荼羅を中心とする二元観をもって内宮・外宮の関係を説き, 『神道五部書』をつくり, 密教のみならず道教, 陰陽道などさまざまな思想を混合して伊勢信仰の権威づけと神秘化をはかり神本仏迹説の奥儀を示した。
室町	() 神道 (唯一神道, 卜部神道)	吉田神社の神官, 吉田兼俱(かねとも)による儒仏道に対する神道の唯一純粋性。仏法は方法の花実, 儒教は方法の枝葉, 神道は方法の根本とする三教枝葉花実説をとらえ, 陰陽道や道家思想をもって神祇の分類と体系化。神本神迹説が成立。
江戸	儒家神道	林羅山『本朝神社考』「神道即王道」の観念による神儒一致論
	垂加神道	山崎闇斎による尊皇的神道
	復古神道	平田篤胤による古来の神道への復帰
	() 神道	国家神道(神社神道)と区別された神道系宗教の総称で, 宗派神道, 宗教神道ともいう。黒住教, 天理教, 金光(こんこう)教など
明治	神社神道(国家神道)	明治以後国家権力の保護の下, 国教的性格を持っていた神社神道

3.09 農民・町人の思想

町人の思想

石田梅岩 1685-1744 丹波の山村の出身。京の商家に奉公しながら独学で神道・儒教・仏教を学ぶ。社会教育の草分け。

主著 『() 問答』: 問答形式で町人徳を平易に説く

石門心学: 王陽明の学説に、神道・仏教の趣旨を調和総合した実践徳の教義。庶民徳、商人道説く。

「心を尽くし()を知るとき、即ち天を知る」(『都鄙問答』): 性=心を知ることが最高の目標とする。

「神儒仏ともに悟る心は一なり」

「商人の売利は士の禄に同じ」: 生産でない、商人の流通による利益も正統な利益であること=賤商観批判
士農工商の身分は「()」: 身分秩序は天職としての社会的分業である。

⇒「孟子モ『道ハ一ナリ』トノ玉フ。士農工商モ天ノ一物ナリ」

() : 商人の道の中心的徳目。人を生かし、ものを生かす。元禄の享楽主義批判
商売によって「先もたち我もたつ。」⇒商人だけでなく普遍的な道

知足安分: 「各人は足るを知って、分に安ぜよ」

() 1648-1724 長崎の天文暦算家

地理、経済での実証主義的思考と通俗教訓書を著す

『町人囊』『百姓囊』: 平等の人間観から百姓町人の心得を説く「畢竟人間は根本の所に尊卑有べき理なし」

() 1642-93 江戸時代前期大阪の俳諧師、浮世草子作者

『好色一代男』『好色一代女』: 好色もの、『日本永代蔵』『世間胸算用』: 町人もの

・ 男女の世界と町人の富の追求、勤勉や儉約、正直や律儀なども描かれる

() 1653-1724 越前生まれの浄瑠璃・歌舞伎作者

「曾根崎心中」「国性爺合戦」「心中天の網島」「女殺油地獄」

・ 義理と()の相克を描く

^{なかもと}**富永仲基** 1715-46 大阪の町人学問所、懐徳堂創建者の息子。神道・儒教・仏教を批判

『翁の文』: 神道批判、『()』大乘非仏説: 仏教の経典は釈迦の言葉ではなく後世の歴史的言説

・ 宗教や倫理の形骸化を指弾し、現実に生きる誠の道を提唱

言語の種々相を分析、思想の特色を規定する民族性、〈くせ〉に着目し、印度の神秘的、中国の修辭的、日本の

閉鎖的傾向を指摘して、各文化類型を相対的に比較観察する視座を提唱 ⇒ 文化人類学的発想の先取

()の説: 自説の正当性を主張するために先行する他説に仮託する傾向

^{やまがたばんとう}

山片蟠桃 1748-1821 大阪の町人学者。豪商升屋の辣腕番頭(!)。懐徳堂に学び学問的関心は多岐にわたる。

主著『夢の代(しろ)』全12巻、百科全書的作品。儒家的知の到達点。

()論: 「神仏化物もなし世の中に奇妙ふしぎのことは猶なし」(辞世の歌)

太陽明界説: 地動説に基づく宇宙論、無数の太陽系(明界)

() 1723-89 日本を代表する自然哲学者、百科全書的学者

医者・自然哲学者 ()学: 自然の条理=法則を探求する自然哲学

主著『玄語』: 条理探究の書、『価原』: 経済論、

反観合一:

() 1703?-62 出羽の国八戸出身の医師, 思想家

『自然 (じねん) 真営道』 農本主義的立場から封建制を批判 『統道真伝』

「()」: 「不耕貪食の徒」である武士が搾取する現実の階級差別社会 → 否定
⇒ 法世を支える儒教, 仏教も批判

「自然世」: 「()」の差別と搾取のない理想の社会

二宮尊徳 1787-1856 相模の国の農政家。苦学の末没落した一家を再興。荒廃した農村の復興につとめる

報徳社を創始

天道: 自然の営み , 人道: 勤労と知恵に基づく人間の働き。

⇒ 天道にしたがい人道に努力することが必要

() 思想: 自分が今こうしてあるのは, 天地・主君・親・祖先などの広大な徳のおかげ

⇒ 恩に徳を持って答えるべき

() と推譲・報徳の具体化, 人道を全うし, 困窮を救い安定した生活を導く方法

分度: 自分の経済力に応じた合理的な生活設計を立てること

推譲: 社会の生産力を拡大するために, 儉約で生まれた余裕を人々・将来に譲ること

「() は万業の大本である」

() 1579-1655 江戸時代初期の禅僧

徳川氏麾下の小土豪として三河国足助(あすけ)庄に生まれ, 徳川氏の移封とともに上総(現八街市)に転じた。関ヶ原の戦, 大坂の陣に参加後, 旗本として江戸駿河台に住した。

1616年大愚が江戸に南泉寺を開いて住するとこれに参じ, 19年武士を捨てて出家した。以後, 仏教復興を念願して, 同じ志をもつ各宗僧侶と交流し, 仏教復興運動の中心となった。

なかでも, 島原の乱後, 天草代官となって復興につとめた弟の鈴木重成の招請によってこの地をおとずれたことは, 仏教による民衆教化の志をいよいよ強めることになった。このため江戸へ出て幕府に仏教による治国を献策すべく活動しその実現に執念を燃やしたが, 果たさずして没した。その禅は仁王禅といわれ, 念仏, 戒律をも重修し, 勇猛心をもって自(じ)心中の仏を念ずるというものであり, また, 僧侶を役人として民衆教化を役とさせるといふ仏教治国, あらゆる職業はそれに専念するとき仏行となる(職分仏行説)という世俗倫理を説き, これらを仮名草子にも著すなど, 多方面に活動した。

主著『万民徳用』 職分仏行説: あらゆる職業はそれに専念するとき仏行となる

3.10 洋学・啓蒙思想

蘭学：鎖国時代の交易相手国オランダの学問 ・ 洋学：江戸時代に移植・研究された西洋学術の総称

◎ () 江戸中期の儒学者（朱子学）・政治家

『西洋紀聞』：イタリア人宣教師シドッチの尋問によって得た知識に基づく。和魂洋才の立場で西洋科学知識を捉え、キリスト教を儒学的合理主義から批判。「形而上なるものは、いまだあづかり聞かず」

杉田玄白 前野良沢『解体新書』：オランダの解剖書「ターヘル・アナトミア」を翻訳

・杉田玄白『蘭学事始』：蘭学発達の回顧録

緒方洪庵：江戸末期の蘭学者，医学者，教育者。大阪に蘭学の私塾「適塾」を開く。門下生に福沢諭吉，大村益次郎など

シーボルト 江戸後期に来日したドイツ人医師。出島の商館勤務のかたわら，許可を得て長崎郊外鳴滝に学塾兼診療所「鳴滝塾」を開設。

※シーボルト事件：帰国時に幕府天文方高橋景保（かげやす）から海外持ち出し禁制の日本地図を受け取っていたことが発覚，国外追放，再来日禁止の処分。高橋は死罪，他多数の関係者，洋学者処罰。

渡辺華山 画家，洋学者。『慎機論』：モリソン号事件・異国船打払い令などを批判

⇒ 蛮社の獄（幕府による蘭学者弾圧）で塾居を命じられ自害

() シーボルトに学び江戸で開業。渡辺華山らと尚齒会を作り

『戊戌（ぼじゅつ）夢物語』を書き幕府の鎖国策を批判。蛮社の獄で捕われる。

幕末思想家

◎横井小楠（しょうなん）：肥後藩士から幕末政治家・朱子学者，開国論，公武合体論，実学思想

「() の道を明らかにし，西洋器械の術をつくさば，何ぞ富国にとどまらん。」

「四海戦争を止めん」

◎ ()：朱子学・蘭学・砲学に通じ，アヘン戦争に衝撃を受け西洋技術の摂取による産業開発と軍備充実を唱える。オランダ語を始めて西洋砲術の塾を開く「夷の術を以て夷を防ぐより他これ無し」。門人吉田松陰の海外密航事件に連座して塾居。のち京都で攘夷派の浪士に暗殺された。勝海舟，坂本竜馬らも門人。

「東洋()，西洋() (技術)，精粗遺さず表裏兼該し，因りてもって民物を沢し，国恩に報ゆる」

和魂洋才 西洋文化は知識技術に限って取り入れる。

◎吉田松陰 『講孟余話』

草莽崛起（そうもうくつき）：藩士としての身分を捨てて在野人としてたちが上がるべき

()：天皇を上戴く統一的国家の構想，「誠」をもって「忠」を尽くす。

幕末の尊王論者，思想家。長州藩士。ペリー浦賀再来のとき海外密航を企て失敗し，長州萩に松下村塾を開く。尊王攘夷運動の指導者（高杉晋作，伊藤博文，山県有朋など）を育成した。安政の大獄で刑死。

日本の啓蒙思想

() : 明治6年森有礼(初代文部大臣, 英米に留学)を中心に西村茂樹(皇室中心主義)・西周・中村正直・加藤弘之(天賦人權論→人權思想の否認, 初代帝国大学総長)・福沢諭吉らが設立。各方面で啓蒙的役割。「明六雑誌」発行。明治8年解散。

福沢諭吉 1834-1901 緒方洪庵の適塾入門。上京して英学を学び3度欧米見聞。慶應義塾創設。

自由主義, 功利主義思想

主著『学問のすゝめ』『文明論之概略』『西洋事情』『福翁自伝』

封建制批判: 「() 制度は親の敵でござる」(福翁自伝)

() 論: 「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。(学問のすゝめ)

権理通義: 人々その命を重んじ、その身代所持の物を守り、その面目名誉を大切にすることの大義

() : 「一身独立して一国独立す」

⇒ () 論: 支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会積に及ばず。正に西洋人が之に接するの風に從いて処分す可きのみ。(中略) 我は心に於いて亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。

() : 人間普通日用に近き実用的学問

「東洋になきものは、有形において数理学(理論と実証)と、無形において独立心と」

= 東洋の学問(漢学=虚学)に対して、西洋の学問(数理学: 今日の自然科学・社会科学・人文科学の一部をふくむ)の奨励

◎ ()

- ・儒学・洋学を学びイギリス留学
- ・スマイルズ”Self-Help”を『西国立志編』として翻訳
- ・J.S.ミルの『自由論』を翻訳=『自由之理』
- 自ら洗礼を受け、キリスト教禁教批判を行う

◎ ()

- ・薩摩藩イギリス留学生
- ・「() 論」: 対等な男女の合意に基づく近代的婚姻形態一夫一婦制を主張
- ・初代文部大臣「学校令」発布
- 大日本帝国憲法発布の朝に暗殺される

◎ ()

- ・佐久間象山の弟子
- ・はじめ() 論を主張、後に**適者生存説**を唱える() 論へ
- ・『国体新論』→『人権新説』『強者の権利の競争』

◎ () (にしあまね)

- ・古文辞学・蘭学を学びオランダ留学, 実証主義, 功利主義の影響を受ける。
- ・西洋哲学を日本に紹介
- 「哲学」「主観」「客観」「理性」「悟性」「現象」「帰納」「演繹」など哲学用語を日本語に翻訳し哲学移入の基礎を作る

3.11 自由民権運動・国家主義

自由民権運動

明治初期、人民の自由と権利の伸長を鼓吹した政治運動。征韓論に破れて下野した板垣退助らによる 1874 年（明治 7 年）の民選議院設立建白書の提出に始まり、主として国会の開設を要望する自由党（板垣退助ら）、立憲改進黨（大隈重信ら）などの組織的運動となって全国を風靡したが、1881 年（明治 14 年）、10 年後に国会を開設する旨の詔勅が出され、また福島事件や加波山事件などの政府の弾圧の強化等により漸次下火となる。

自由民権思想：

- ・（ ）系民権思想： アダム・スミス、ミル、スペンサーなど
⇒明六社…官民調和的
- ・（ ）系民権思想： ルソー、ヴォルテールなど
⇒中江兆民、植木枝盛…急進的

◎中江兆民

：明治期の思想家、評論家。土佐藩出身。東洋のルソー、岩倉使節団とともに渡欧。2 年にわたる滞仏生活の後、帰国。仏学塾を開いてフランス学の普及を目ざした。1881 年西園寺公望らと始めた「東洋自由新聞」は、その後死ぬまで継続される藩閥政府批判と自由民権の確立のための言論活動の最初の舞台。

- ・主著『（ ）』（ルソー『社会契約論』の漢訳）、
『（ ）経綸問答』：3 人の男が酒を飲みながら日本の針路について議論する話。
洋学紳士：徹底した民主化と非武装によって日本を民主平等道徳学術の実験室とする急進的改革主張
東洋豪傑：大陸侵略とそれをてこにした国内改革によって変弱為強の業を実現する強行策
南海先生：与えられた小邦の条件の中で対外的な「過慮」＝過剰な危機感、を抑制し和交を第一とし、国内的には恩賜の民権を徐々に本来の回復の民権に近づける持続的な努力の必要性を説く
喉頭癌で余命 1 年を宣告されてからはいっさいの社会活動から身を引き、自由な言論人、孤独な理学者という真我に立ち帰って『一年有半（ゆうはん）』『統一年有半』の 2 著を残す

・思想

急進的な天賦人権思想

（ ）的民権（日本の民権）：為政者が上から人民に与えた人民の諸権利

↓

（ ）的民権（英仏の民権）：天賦人権の回復を求める革命により、人民自らが勝ち取った自由・平等の権利

◎（ ）

：徹底した民主主義を主張した自由民権家、思想家。土佐藩士出身。板垣退助の演説を聞いて政治に志し、明六社の演説会などで啓蒙思想に接した。立志社に加入し、立志社のために私擬憲法を起草、最初の全国政党自由党の結成に参加。

主著『民権自由論』

「東洋大日本国国憲按」：植木枝盛起草の私擬憲法案、君主権能の制限、基本的人権の無条件保障、抵抗権の規定など

◎（ ）

：明治時代の政治家。栃木県出身。第一回衆議院議員。20 年にわたり足尾鉍毒事件について政府と抗争。衆議院で足尾鉍毒問題についての質問を行う一方。日清戦争後鉍毒被害の拡大、激化にともない、被害農民の押出し（大挙上京請願運動）と議会活動とを結合して政治闘争を展開。その後、議員を辞職し 12 月 10 日天皇に直訴（直訴状の執筆は幸徳秋水に依頼）。終生、鉍毒問題と治水事業に尽力した。

国家主義（ナショナリズム）

：儒教主義の復活と鹿鳴館外交に見られる欧化主義批判など

人名	著作	キーワード	特徴
()	教学大旨	教育勅語起草	横井小楠の影響を受ける。国教を確定し天皇中心の政教一致の国家体制を提案。
西村 茂樹	()	国民道徳は儒学	佐倉藩出身。明六社メンバー。欧化主義批判。儒教と西洋哲学の融合⇒儒教の重視
()	雑誌()	平民主義→国権主義	民友社
三宅 雪嶺	雑誌 日本人	() 主義	() 社
()	新聞 日本	() 主義	日本の伝統の美風を保持しつつ、自主的な改革をすすめる。
北 一輝	日本改造法案大綱	国家主義運動の理論的指導者	二・二六事件には直接関与しなかったが、事件の黒幕とみなされ銃殺刑。

◎ ()：佐倉藩出身。倫理学者、教育家。はじめ儒学を学び、のち洋学を佐久間象山に学ぶ。明六社の設立メンバー。啓蒙運動を行う。欧化主義を批判し儒教道徳重視、国粋主義の先駆。

主著『日本道徳論』

・元田永孚（ながざね、えいふ）：明治天皇へ侍講。天皇中心の教育を構想。学制以来の欧米流の教育政策を転換させて、仁義忠孝を中心とした儒教道徳の復活をはかる。「()」の起草に参加

◎徳富蘇峰：熊本県出身。評論家、歴史家。「民友社」を創設、雑誌「国民之友」を創刊「国民新聞」を創刊。以後四〇年間、社長・主筆として自由平等、平民主義の論陣を張り、近代日本の代表的時論家として活躍。日清戦争以降は国権主義（国粋主義）に傾き、第二次世界大戦中には、大日本言論報国会会長をつとめた。

平民主義（平民的欧化主義）：鹿鳴館的な貴族官僚中心の欧化主義を批判し、国民大衆の立場から西欧文化の受容と日本の近代化をめざす思想

国権主義：民権論に対抗する形で登場した。国家の権力が強化されてこそ人民の権利や自由が保たれる、と主張する思想

◎三宅雪嶺：石川県出身。評論家。明治政府の欧化政策に反対して国粋主義を唱え、「政教社」を結成して、雑誌「日本人」を創刊。徳富蘇峰と並んで明治・大正・昭和にわたる論壇の雄。

国粋主義：三宅雪嶺、志賀重昂（しげたか）ら政教社の雑誌「日本人」が、明治維新後の文明開化、条約改正と関連して政府が推進していた欧化主義に反対して唱道。

◎陸羯南くがかつなん：津軽藩出身。新聞記者、評論家。新聞「日本」を創刊して社主となり、社説、評論を執筆。藩閥政治、官僚政治に反対し、立憲政治にたつ国民主義を唱えた。

()主義：伝統的な共同体の秩序の支点としての天皇の権威が強調されながら、立憲化や産業化の必要性認識。社会や文化の面ではできるだけ伝統を保守しつつ、政治や経済の面では漸進的に改革を実現しようとするもの。政府の欧化政策と民権運動の天賦人権論を批判

3.12 日本のキリスト教・社会主義・大正デモクラシー

キリスト教思想

・内村鑑三

高崎藩出身、札幌農学校時代に受洗。キリスト教無教会主義の創始者

著『予は如何して基督信徒となりし乎』『キリスト信徒の慰め』雑誌「聖書之研究」創刊

二つのJ：() と ()

無教会主義：教会や儀式にとらわれず聖書の言葉による信仰

非戦論：日露戦争への反対の姿勢

() 事件：第一高等中学校講師時代の内村が、教育勅語の奉読式で勅語の「宸署」(天皇直筆による署名)に対して敬礼を行わなかったことが問題化し、学校を辞職した事件。

『武士道と基督教』：「武士道の上に接木されたる基督教」

・新渡戸稲造

南部藩出身、札幌農学校時代に受洗。米独に留学。クェーカーの信仰に共鳴

京都帝大教授、一高校長、東京帝大教授(植民政策講座を担当) 初代の東京女子大学学長

国際連盟事務局次長：「太平洋の()」となることを志す

『()』英文で外国に日本を紹介。キリスト教を受け入れる素地としての武士道。

・新島襄

安中藩出身、明治の教育家、宗教家。

元治元年渡米、アマースト大学を卒業後、キリスト教に入信。明治四年同志社を創設(京都)

・()

上総の国の旗本の子。横浜で洋学を学ぶうちに入信。「東京神学社」設立、伝道者の養成

日本の精神的伝統に深い関心 → キリストの福音による革新と復興を唱える

臣民道徳を絶対的とする立場を批判、人間の自由を唱える

⇒内村不敬事件をめぐる()との論争「教育と宗教の衝突事件」

⇒キリスト教による普遍的正義をもって国家を愛し、その進歩に貢献することは可能であり、またそうすべきであるとした。

社会主義思想

・キリスト教的社会主義

社会民主党結成メンバー

() キリスト教人道主義の立場から議会主義に基づく社会主義運動、日本フェビアン協会

()：日本最初の近代的労働組合を組織。アメリカへ亡命。コミンテルン(第三インターナショナル)：1919年レーニンがモスクワに創設した国際的な労働者組織。各国共産党を直接指導)に参加

・唯物論(フランス)的社会主義……中江兆民の影響

・()：中江兆民の書生、著『二十世紀之怪物帝国主義』『社会主義神髓』

平民社を設立、『平民新聞』で反戦を唱える⇒議会主義を否定する()論主張

大逆事件で政府に天皇暗殺の首謀者に仕立てあげられ刑死。

無政府主義() 帝国主義は()を経、()を緯

・マルクス主義思想家

・() マルクス主義を「道」ととらえ求道。著『貧乏物語』

大正デモクラシー

第一次大戦後、大正期の民主主義、自由主義的運動

・()：東大教授「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」：デモクラシーに民本主義の訳語を与え、普通選挙と言論の自由に支えられた政党政治の実現を要求

()：天皇主権を認めながら、政治の目的は民衆の利福、政策決定は民衆の意向による

3.13 近代的自我と文学

・近代的自我：内面的、主体的な「()」としての自己意識

・浪漫主義：自由な感情や豊かな想像力を重視し、自我・個性の尊重と解放を主張

日本のロマン主義（浪漫主義）は、封建的社会から近代市民社会への転換期を背景に生まれた。それゆえ、自我の確立と拡充、思想と感情の自由を急進的に求めたところに特色をもつ。それは、西欧文化とキリスト教思想の受容による、前近代的な儒教倫理や封建的習俗への反逆となって現れた。また伝統的な美意識による、西欧的な合理思想・功利主義への抵抗となって現れた。この二つの相反する動きのはざまを母胎として、日本の浪漫主義は成立している。

その先駆けは、森鷗外『舞姫』などの三部作や、『文学界』（1893～98）によった北村透谷の評論、島崎藤村の詩である。彼らは美と自由を主張し、人間性の解放と主情的真実を探り、自我の確立を目ざした。ついで明治20年代末に登場した高山樗牛は自我の充足と拡大を唱え、浪漫主義の理論的裏づけを行った。

本格的な浪漫主義は、明治30年代の詩歌全盛の時代とともに開花する。主流となったのは、与謝野鉄幹・晶子夫妻を中心とする『明星』（1900～08）である。好んで星と堇（すみれ）を歌い星堇（せいきん）派と称された。その本質は、奔放な情熱による自我の解放と恋愛至上と空想的唯美的の世界への陶醉にあった。

()：『文学界』創刊、文学的内面的世界（ ）に自我の実現と自由を求める。

「内部生命論」：日本文学における（ ）の発見 実世界を超越した想世界

()：『文学界』創刊、『若菜集』（ロマン主義）から『破戒』（自然主義へ）

与謝野晶子：自己の官能、感情を大胆に表現、封建的道德に抵抗『みだれ髪』

・（ ）主義：自己の内面を直視して赤裸々な人間の姿を描く

19世紀前半のロマン主義に対する反動としておこった写実主義の思想を受け継ぎながら、現実を支配する自然的・物質的条件をいっそう重視し、生物学的人間観を強く打ち出したのがヨーロッパの自然主義である。

日本の自然主義は日露戦争後に、浪漫詩人の自己転身の形をとって、個の解放を求める主我性が既成の権威を否定して人生の真に徹しようとする志向と結びつくという形で成立した。島崎藤村の『破戒』（1906）と田山花袋の『蒲団（ふとん）』（1907）がその記念碑的な作品である。『破戒』は主題と方法の清新さによって、『蒲団』は実生活の愛欲の赤裸々な告白として、いづれも文壇に大きな衝撃を与えた。

日本の自然主義の際だった特色は、『蒲団』の強い影響下に虚構と想像力による作品創造を避けて、実生活レベルでのあからさまな自己表白の文学を目ざしたところにある。閉塞した現実のなかでかろうじて個を擁立する方法であったが、当然、社会性の喪失ないし希薄化を免れなかった。

田山花袋：『蒲団』

石川啄木：『一握の砂』『悲しき玩具』⇒社会主義へ傾倒

◎夏目漱石

自己本位：倫理性に根ざした自我の確立

⇒自己本位に根ざす（ ）：日本人の主体的な内発的開化求める『私の個人主義』

()：漱石晩年の心境。小さな私を去り自然の命ずるままに自分をまかせ

・森鷗外

() レジグナチオン：避けられない自分の運命を甘受することにより心の安定を図る

『舞姫』『高瀬舟』

・白樺派：文芸雑誌『白樺』、徹底的な個人主義とそれに基づく（ ）主義

武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎

・女性解放

() 雑誌『青鞥』「原始女性は太陽であった。」

母性保護論争：() との論争、母性は国家によって保護されるべきか否か

3.14 西田幾多郎, 和辻哲郎 日本の思想家たち

◎西田幾多郎 『()』

() : 主客未分 (主観と客観の対立以前) の直接的な経験。真の唯一の實在。

「色を見, 音を聞く刹那」「赤なら赤だけである」知情意の分離以前

善とは: 人格の実現, 純粹経験の分化発展,

真の自己を知ることによって, 大いなる意識の統一 (人格) を宇宙全体の統一力 (神) と合致させ,

主客合一の力を自得すること。その主客合一の力が純粹経験

『働くものから見るものへ』, () の論理: 反省し尽くすことのできない真の自己,

我とは一つの点ではなく一つの円, 物ではなく場所

知識が成立する場所

絶対無の場所: 有と無の対立が成立する場所

無である鏡の自己が自己を映し出す場所

() : 有に対立する相対的無ではなく, 一切の存在物の根拠となる無

() : 實在 (現実の世界) は絶対相反するものが自己同一,

cf. 華嚴經 一即多, 多即一

西田は, やがて『自覚に於ける直観と反省』(1917)等の著作を通して, はじめの純粹経験の立場のもつ主観主義, 主意主義にきびしい批判を重ね, ついに〈場所の論理〉に到達した。それは, 實在の根底を弁証法的な一般者とし, 単に反省的思惟ではない行為的直観におけるその自己限定として世界をみる〈絶対矛盾的自己同一〉の論理であり, 〈知〉と〈行〉の一致の極致としての絶対無の弁証法的論理であった。ここに近代西欧の理性主義的論理を超える東洋文化の哲学的根拠が与えられたとされ, 〈西田哲学〉の呼称も, この立場を明確にした『働くものから見るものへ』(1927)が世に出されるころから行われた。西田は, 『一般者の自覚的体系』(1930)や『無の自覚的限定』(1932), 『哲学の根本問題』(1933)などでこの立場を練り上げたが, そのころからマルクス主義が日本の思想界に大きな影響をひろげるようになった。西田もそれと対質しつつ〈歴史的現実世界〉の問題と取り組み, 〈場所〉を〈弁証法的世界〉として具体化し, 〈絶対矛盾的自己同一的世界の自己限定〉として〈歴史的實在〉の世界をとらえる立場を展開した。

◎ () : 『人間の学としての倫理学』『風土』

風土

() の学: 人間とは「世の中, 世間」であると同時に, 人 (個人) である。

() 的存在: 人間は人と人との間柄においてのみ人間となれる。

個人と社会の弁証法的統一

◎柳田国男 『() 物語』『先祖の話』() の歴史, 田の神信仰, 祖霊信仰

◎折口信夫 () 日本人の神観念, 他界からの来訪者

◎南方熊楠 在野の博物学・民俗学者 鎮守の森の生態系を守るため () 令に反対

◎柳宗悦 () 運動: 生活に即した民芸品の「用の美」

赤穂事件と徂徠 元禄赤穂事件における赤穂浪士の処分裁定論議では、林鳳岡をはじめ室鳩巢・浅見綱斎などが賛美助命論を展開したのに対し、徂徠は義士切腹論を主張した。「徂徠擬律書」と呼ばれる文書において、「義は己を潔くするの道にして法は天下の規矩也。礼を以て心を制し義を以て事を制す、今四十六士、其の主の為に讐を報ずるは、是侍たる者の恥を知る也。己を潔くする道にして其の事は義なりと雖も、其の党に限る事なれば畢竟は私の論也。其の所以のものは、元是長矩、殿中を憚らず其の罪に処せられしを、またぞろ吉良氏を以て仇と為し、公儀の免許もなきに騒動を企てる事、法に於いて許さざる所也。今四十六士の罪を決せしめ、侍の礼を以て切腹に処せらるるものならば、上杉家の願も空しからずして、彼等が忠義を軽せざるの道理、尤も公論と云ふべし。若し私論を以て公論を害せば、此れ以後天下の法は立つべからず」と述べている。